



# MRI全身用造影剤（ガドリニウム製剤）に関する説明書

造影剤は、病気を診断する上での重要な情報を得るために役立ちますが、副作用が起きる場合があります。以下の説明をご理解、ご納得の上で、問診票記入と同意書署名をお願いします。

1. 造影剤とは、病気の存在や性質をより詳しく知るために用いられる検査薬です。  
通常、静脈注射で投与します。  
腎機能が正常であれば、注射後6時間程度で80%が腎臓から排出され、やがて全てが体外に排泄されます。
2. 血管内に注入された造影剤は、血液と共に全身の臓器に届きます。  
従って、造影剤を投与することで血管腔の状態、臓器の血流状態、および病変での造影剤の状態がわかり、画像診断上重要な情報が得られるようになります。
3. 血管外に造影剤が漏れることがあります。注射した部位が腫れたり、痛みを伴うこともあります。  
ほとんどの場合は時間がたてば自然に吸収されるので心配はありませんが、漏れた量が非常に多い場合には処置が必要となることもあります。
4. 造影剤の血管内投与で、副作用が起きる場合があります。  
現在、副作用が起きることを予測することは困難です。ただし、統計学的には副作用発現危険因子が知られています。そのため、事前の問診が大切です。MRI用造影剤過敏症の既往がある場合は副作用発現率が**8.9倍**、喘息の既往がある場合は**1.5倍**、造影剤以外のアレルギー歴がある場合は**1.9～3.8倍**に増加します。
5. 造影剤による副作用には、以下のような軽いものから、まれに処置が必要な重いものまでがあります。  
通常検査中に起きる「即時性副作用」が大部分ですが、場合によっては検査終了から数日後におきる「遅発性副作用」が見られることもあります。「遅発性副作用」の症状は「即時性副作用」と同じく下記に示すような症状が発現する可能性があります。通常は自然に回復しますが、副作用と思われる症状が発現した場合には、速やかに連絡してください。外来患者さんの場合、造影検査後帰宅される場合でも、造影剤投与から**30分**は院内にてお待ちください。  
大変まれではありますが、死にいたることがあるという報告もあります（**40万人～80万人**に1人）。
6. 重篤な腎障害がある方は、造影剤投与**2～75日**（中央値**25日**）後に腎性全身性線維症という重篤な疾患を発現することがあります。
7. 造影剤投与後の24時間以内の母乳移行は投与量の**0.04%**未満とされています。乳児消化管からの母乳造影剤摂取はさらに少なくごく微量です。基本的に造影剤投与後に授乳を中止する必要はないとされています。
8. 同意された後でも検査直前に同意を撤回することは可能です。その場合はスタッフにお申し出ください。

---

## 【副作用の種類】

- 1) 軽い副作用 {発汗、口渇、頭痛、めまい、蕁麻疹、発疹、発熱、くしゃみ、咳など} ……**100人に5人以下**
  - 2) 重い副作用 {ショック……**0.1%**未満、アナフィラキシー様症状（呼吸困難、血圧低下、顔面浮腫、咽・喉頭浮腫など）……**0.1%**未満、痙攣発作……頻度不明} ……**約2万人に1人**
  - 3) 死亡……**40万人～80万人**に1人
-